「現代能楽集」の挑戦 錬肉工房 1971-2017

The Work of Ren'niku Kobo 1971-2017

は

岡

本

OKAMOTO Akira

房を創 営為の内実が問 演劇、 十四作品を上演している。本書では、そうした「現代能楽集」の連作の挑戦の試みを中心に据え、 して一九八九年 線で活躍する多様な論者、 は 設 現代芸術との交流、 世 界 L こたが、 に 類 例 د ي カュ 直されている。 0 らはそれをさらに深め展開するために、「現代能楽集」 活 動 ない独自の優れた特質、 の 初期より能を現代に開き、 展開 表現者により、 の可能性、 そしてさらに 構造を持つ伝統演劇である。 多面的な角度から能の本質とは 活かしていく活動を持続的に行 は長期間 に 亘 る錬肉 私は一 の連作を始 工 房 何 九七 0 か 実践活動、 また能と現代 8 ってきた。 年に 現在まで 練肉工 その

の関係を根底から問い直し、 み 心に、 錬肉工房では、 作業を行 前近代の演劇 ってきたが、 これまで通常の現代演劇の枠組みを根底から捉え返す、 伝統的な文化とどのような関係を持ち、 新たな その中心的な課 倉 Þ 題は次の四点である。 〈身体性〉 の可能性を模索する作業。 切り結んでいくのか。 一つ目 様々な実験的、 は △言葉 葉〉 二つ目は、 三つ目は 根源的 〈身体 能を

中

試

も二番 して メデ 題 K カミ み ィ な 最も ると 目 ジ 0 ャ 重要な軸で 能 身 体 を ル 中 問 から 0 題で بخ 心 表 に の 現 あ 前 あ ょ 者 5 ったことは言うまで 近 る た 代 に ち 関 ٤ の 演 れ わ 0 劇 脱 2 6 は 7 領 当 文化とど 7) 域 的 然相 < 0 もな 互. かっ 0 に 断 よう 密 的 高 度情 接 な な 作 に 関 関 報 業 |係を: 係 化 0 社 課 L 持 あ 会 題 ち 9 0 7 中 そ 実 切 て L ŋ 践 7 0 され 結 身 最 W 体 後 ~ てき 0 د ي あ り方 < た かい の 刀 か を ノ 莧 そ 口 ٤ 0 9 ジ 中 8 1 47 5 直

Þ

そ 期 な 毎 か 問 の 回 根 6 د ي 新 直 底 何 た ろ 故 な ئے に 能を は 共 貫して 現代能 通 現代 本書で多 0 課 あ 題 に 楽 る 開 集 問 面 ₹ テ 題意 的 1 0 伝統、 連作 に V 識 展 を 開 掲げ、 ٤ に 0 現 作 9 3 上業では、 代 れ د ي て少 探求 ~ 0 諸 いるのでご覧 課題 l が 触 多様 試 を みら n 捉之 7 な は芸術 お れ れてきた。 返す 3 د ی ただくと た ジ 作業を ヤ 47 ン そ ル 持続 ī 0 0 表現者 て、 作 的 業 に ここでは、 0 行 内 が って ~共同 実や きた 方 作 私 法 かっ かき 論 を に 活 0 うた 関 具 動 体 L 0 初

う能に固 演 はず ん勝 7 あ 0 りに じら 高 る は د ي そ L 度 手 そう る の中で 設 有 カュ 通常 な な 側 気 之 0 そ 儘 L る b る 面 〈変身〉 B 同 かゞ 能 8 た n 0 0 時 あ 恣意的 屈 根 ٤ ح 0 は は 重 るが、 一要なも 型 は は 極 に 例 源 カミ なく まり 的 出 な の に 之 演 縛 な自 な 来 77 同 ば 普 な 技 のが じ定型的な型や そうし 6 自 る 遍的、 など 能 由 0 17 由 n うし なぞ た Ξ ئے かっ は、 た強い 一点あ は 道 イ 0 た型 ŋ 手 成 な メ 本 質 0 令 5 掛 そうした緊張 1 n 13 演 は 的 規 ジ て、 かっ 様式 対でし 動 範 が 様 能 り な課題である の きも、 先ず 性 ある 乱 は K の 二 型 な 知 拍 ⁶芸術 法則: 恵 カュ そ が 子 演者 感の な 様式 カミ 面 0 0 性を背負った中で 秘 表 性 7, 段 そ の本質 現 は に あ 0 9 8 0 0 問 よって深い (る根) 洗 は 自在 ず ٤ 6 0 آح. 題 練 n ジ 7) 源的 能の本 9 化 は ヤ 7 で充 た両 自 そ パ د ي ン ガゞ n 夕 な自 極 由 3 ル 実 を ĺ 極 感銘を与えたり、 まで 0 に に 質 ĺ の根 نح ン 0 由 あ ٤ 超 ٤ た 事 化 ると 0 之 進 は 0 L 態 源 み 7 な 7 7 間 思 B 的 B 惰 9 0 د ي 性 型 根 な自 重 < 0 b かっ また 要 化 能 現 に 転 n 源 ほ n 由 縛 的 な 換 る どど赤 夢 課 形 正 カミ 0 6 な そこ れ 姿と考 幻 そ 題 骸 に 自 裸 瞬 化 能 n 由 型通 に あ 拘 は を 0 K 0 تخ 罠 井 に 之 は 束 B 間 (B) 浮 0 り 筒 あ z ち 題 能 ょ

明

無視 課題 生じた とし 世 新 ۲. Į わ て二 以 けで、 7 降 取り 9 の 目 日 組まれてきた。 本 そのことは演劇 の 踊 問 0 る 近 題意識として、 な 代化 動け。 の 中で、 そ の領域でも、 / 『歌うな。 れは築地小劇場の小山内薫の、 多様な領域でそれまであった文化伝統を否定、 「伝統と現代の断: 近代リアリズム演劇を移入、定着することは重 語れ。一 絶と接合」 のモットー 0 「『歌舞伎を離れ 課 に見られるような、 題 カミ ある。 周 ľ, 切 知 断 0 よう 意志的 る必必

造 ジャ び てきたのは、 きな課題であると思われる。 伝統と現代の断絶と接合」 ルでも づ けて 间様 このような の < 事 0 態 かという、 拡がりを持った根源的で重要な課題を少 かゞ るあり、 能を現代に開 の問題は、 さらに言えばこうした日本の明 断 絶と接合」 き、「伝統と現代」 文化、 の課題も浮上してくる。 社会の構造をも貫く、 の関係性を問う活動を持続 治維 しでも実践的、 新以降 これ いまだ解決 の はも 伝 「統と近 盆 ちろん 的 していな 代 的 他 0

統との

切断がそこに

存在した。

しかし、その時同時に、それまでの演劇伝統とどのように

切

な

0

重 芸術 ŋ 『伝

では、 表現として現出 三つ 能 毎 の本質的な構造 目としてアク 回 能 Þ 狂 することが目指され 言 チュ 0 が浮か 演者 ア に参 ルで根 び上がるとともに、 加してもらい、 源的 てきた。 お共同 さらにそこでは多様な芸術ジャ ?作業の場の問 多 様な芸術 同時にそれが、これ ジャ 題 がある。 ンルの表現者 までにない新鮮 現代能楽 と共同 ン ル 集 の 表現者が、 作 な 0 を行 連 現 作 在 0

な形で対象化出

来ればという問題意識があったからだ。

可

視

的

試

み

作業

の

中

能

と直

接

出

会

67

そ

れを手掛

かりにすることで、

それぞれ

0

ジ

ヤ

ン

ル

0

枠

組

み

ま

共同

断され えたい 個 ル k ポ の課 間 1 モ そして 7) 挑 題 が照ら ダ 戦 7 過去と てきた。 通 し出され、 L の悪 b 大衆消費社 またアクチュ いうのは、 17 状態 揺さぶりがかかり、 に あり、 の中 私たち アル そ な外的 これを私は「ただの現在」の演劇を含めた芸術創造 見易 新たな表現のあり方を探ってい 々とジ 状 況 ャ 今とも切 ン ル 0 横 断 ٤ され の 断 現場は、 呼んで が 可 てしま 能 0 ۲) ようでい 9 けるような場 る かっ 7 0 な だ ŋ 朝 かゞ 鎖 的 他 物を設 それ 方で

もら れてきたと言える。 間 0 捉え返し にとっ 的 かゞ 題意識 発見 な共同 すぐに や手 7 が b 能 商 が 活 掛かりをそこで見い出すことがあるはずだ。 行 同 化され、 動 わ 様であり、 の現場をそこに創り出 一つの重 の初 n 期 型や様式 から 要な手 囲 自身 13 込まれ 掛 貫して根 の基盤に が 身につけてきた型や様式、 かっ 9 てしまう。 せればと考えてこれまで試 底 ある声や動きの原理的な筋道、 核として本来的な意味で横断的であり、 に 存 在 そうした現状を見据 毎回 様 振り返ってみると、 身体技法に根底から揺 々に工夫を重ね みてきた。 えな 芸の深奥を体得していくため かゞ 6 それ なが こうした三つ 能 ら多 は 7 の 25 演者 もちろん 刀 面 チ 的 ŋ に ユ も参 に が アルで根 の重 能 問 カュ かっ 0 加 Ď, 演 直

席者に シンポ ため が行わ 角度から討議 能 された。 の A Y A K O の第一人者の表現者、 〈ことば〉のい の本質や能と現代芸術の接点 さてここで、 ジ よる錬肉工 さらに深 これ ゥ 現 ムの が 0 連作の作業を開始する上で、 が行 核 は 出 一来ず の問 発言を踏まえなが 本書刊 のち、〈からだ〉 「現代能楽集」 S E K 房 わ 題 アト 残念な思いが 展開 れた。 研究者の方々に出席していただき、 が 行の経緯 I G U C H I 語 リエでの連続講演会を企画した所、 した発言の機会をこちらで設けることが出 6 その内容は本書の第四章に収録され れ刺激的 の連作を始 そして能 の声 に あり、 らも、 ついて述 のため ح 大きな手掛かりや示唆を受けた。 あっ 背景のそれぞれの仕事により沿った形で、 そ 能 の の背後に存在するコスモロジー、 めるに の 0 べておきた た。 時 コスモロ かっ 姨 ただシ 6 あたり、 (捨) 何 6 ジーと身体性」というシン ン カュ い。「現代能楽集」 カュ の形 ポジウムも講演会も限られ 〈言葉〉と〈身体〉 ら開始したが、 それまで交流のあっ 快諾 くい で内容を活字化したいと考えて していただいた。 来な るが、 かと、 ただ時 充実した貴 実はその の 身体性 連 の関 作 た多 間が限 縦横 係性を は そ 九 ポ に 時 た聴 九〇 重 の 様なジャ ジウム 9 に併り 講 られ に な د ي 衆 能 演 车 軸に 九 遣 て多 行 会で 八 り取 Þ カュ 7 かゞ して、 様 開 九 L カュ د ي た ŋ

四十周 実は 寧に準備を重 中に収めようと考えたが のことが の折で、 ね今回 本書刊行のそもそもの発端となった。 その記念としてこれまでの活動を多面 0 四十五周年記念論集 内容が多岐に亘り、 『「現代能楽集」 編集の都合で発刊が延期となった。 それ 的 に が具体的に動き出 捉 の挑戦 え返す 論集の刊行 鍊肉工房1971-2017』 した の かゞ が そしてその 目 錬 指 肉工 され、 後 そ

構造、 捉え返しの作業が行われている。 行 ルの論者、 この二〇一七年までの長期間に亘 本書では、 の 運びとな また現代演 話者により、 9 シンポジウ た 現代芸術と能との横断的な交流 論考、 4 講演だけではなくさらに大きく展開 エ ーッセイ、 以下簡単に全体の内容を紹介しておきたい。 る持続的な営為の意味や内実が、 シンポジウム、 の作業、 講演、 そして錬肉工房 対 Ļ 第一 談 充実した形 線で 座談会など多様な角度 活躍 かの、 す ر» س る様 九七 能 K 0 本 な 年 質的

ジ

かっ

な

か ヤ

が

取

三編が収録されている。 水の声』 げられ、 章では、 の 上演過程を踏まえ、 その課題、 岡本章の 「『現代能楽集』の作業」は、 問題意識、 能と現代」に関するこれまでの論考の中 型や様式の二面性の課題を考察する。 方法論が多角的に論じられる。 連作 の中から代表作 カュ 「〈形〉 6 「現代演劇と能 のい 本書の に つい くつか 内容 <u>ر</u> に かゞ は、 人具体的 は 深 く繋 現

てい 房の初期の仕事が、 る アングラ・小劇場演劇と絡め、 能との関係性を重要な切り口にして捉え返され

第二章では、

五.

人

の批評家

西堂行人、

田 宝幸子、

新

野守広

に

より、

肉工 代

0 錬肉工房と岡本章 お 論考 視点 詫びするととも 三章では、 設 具体的 四十 現代能楽集」 に、 0 周 な上演を踏まえ、 これまでの営為について、 今回そのままの形での掲載の許可をいただいたことに感謝 年 。 の 際 や研究者、 に書き下 の連作の試みで共同作業を行ってきた、 その作業の意味や内実に ろしを依頼 多様な角度から考察が行 したもので、 羽田 昶 竹本幹夫、 編 ついて鋭く分析され 集 0 都合で刊行 多様な芸術 わ 小 れてい L かゞ る。 遅延し た 7 それぞれ ヤ د ي る た ル 0 (独自 れ

ジ

ン

006 007

現代演 やその作業過程 つの重要な手 エ 0 ッ 表 現 セ イ カミ 能 収 高 掛か めら 糸 誠 9, また問題意識が生き生きと描かれてい あやつり人形、 れ くい 核とした、 間 る。 金 記 これらは今回 田 舞踏、 ジャンルを超えたアクチュ 中 純 現代詩、 笛 の四十五周 田字 ストー 郎 年記念論 鵜澤 ij - テリン 久 ア ル 集 上 で根! の 杉満 グなどの表現者により、 ために 源 代 的 な共同 書き下 古屋 作 うろさ 和 業の れ 場 た 横 B の あ 能 ので 桂 ŋ を 子 0

る

肉工房と岡本章の30 と現代演劇」 世銕之亟、 伝統と現代の根底 第四章では、 の声」 は 高橋康也、 は 既に述べ ニっ 二〇〇二年に早稲田大学演劇博物館主催で行 の課題が実践に即して具体的に討議され 年 のシ 渡邊守章、 たように、 0 ン 際 ポ の観世榮夫、 ジ ウムが取り上げられてい 岡本章の 一九八九年の 岡本章、 出席に より、 「現代能楽集」 竹本幹夫に 併行して開催されたものである。 る。 てい 最初 よる わ れ の連 の た シ 作の開 ン 「〈ことば〉 企画展 ポ ジウ 始時 ムで、 『伝統と前 の 大野 能と現 0 衛 次 雄 代 0 演 カュ 能 観 6

岡本章 それ まえながらもさらに深 観 第五章では、 は舞踏 世榮夫の講演は、 0 B の は 現代詩 錬肉工 8 二〇〇六年に明治学院大学で行わ 人 房アトリエで開催された連続講演会を中心 年の楽劇学会大会での基調講演で 能楽師、 展開して、 英文学者、 能や多様な芸術表現 仏文学者によって、 れ た の核心 あ シ る ン ポ 0 に講演会の内容 ジ 問題が自在 _ ゥ 九 八八九 ム 0 年 際 に語ら の 0 が掲載 B シ ので ン ñ ポ てい され ジ ゥ る 2 7 を また د ي る

本章が くい 第六章では、 る 能 や多 何 て巻末の第七章では 6 よるそれぞれ また観世銕之亟 様 カュ の形で関 な現代芸術 様々な場 独自 わったものであり、 0 機会、 野村萬、 本質や魅力、 の 能楽観、 資料集として 媒体で行われた対談、 梅若実、 その修行の過程 「現代能楽集」 舞踏家、 『現代能楽集 観世榮夫、 能楽師、 に の連 櫻間金記、 座談会が収 ついての貴重な発言も収 の連作 作 狂言師、 の作 業の課題 いめられ 鵜澤久など実績 覧」、 作曲 くい 家、 鍊肉工房活動公演年 に 9 映 る 録され 17 画 7 史家など بخ 0 縦 あ n 横 B る 能 編者 に 語 楽 ょ 師 6 0 岡

をご覧いただくと分るように、 錬肉工房・岡本章演出作品演劇批評集成」が収められている。 錬肉工房では創設以 来 現代能楽集」 活動公演年譜、 の連作以外に 演劇批評集成など も多数 実験

的、 以上 根源的な舞台上演、演劇作業を行ってきている。 が本書のあらましである。 これまでこうした長期間に亘る実践活動を持続、 展開することが

とする、 出来てきたのは、 多くの得難い出会い、 共同作業に積極的に参加していただ 助力、 支えがあったからに他ならない。 ۲) た多様 なジ ャ ン それらの方 ル の表現 者 K の に感謝 方 K をは 0 気持 じ

る所があればと

願っている。 い直され、

源的

な課

題

ちを述べ

るとともに、 が問

本書の刊行が一 閉塞状況

つの契機、 さぶりが

手掛りとなって、

様々

チ ュ

ア

で根

に 揺

カュ

かり、

演劇、

芸術

の

表現領域 な現場でア

0 活 刀

性化に

つな ル

の

3	2	1	論考			
現代演劇と能	〈形〉について―	「現代能楽集」の作業		第一章		はじめに一口
現代演劇と能――「錬肉工房」創設の頃 岡本章	·形〉について――現代能『水の声』の試み 岡本章	の作業 岡本章				岡本 章
岡本章	岡本章 038	岡本章 016	論考			

「現代能楽集」の挑戦 錬肉工房 1971-2017

目次

第一章

書き下ろし論考

4 5 岡本章の舞台と能 岡本章と能、もしくは観世寿夫一竹本幹夫 岡本章さんの「現代能楽集」|羽田昶 実験演劇の現在形 エネルギーの交感 異色の現代能『ハムレットマシーン』|新野守広 -現代能『春と修羅』を中心に | 小田幸子 |岡本章と錬肉工房の四十周年に寄せて | 西堂行人 … 064 097 087 078

第一章

エッセイ

5 4 3 2

岡本章さんとの仕事|上杉満代

氷山の下一古屋和子

観世寿夫先生を通じて能と岡本さんと私

鵜澤人

147 14 139

151

136 132 126

演劇の本質力|笛田宇郎

態

田中純

錬肉工房での試み|櫻間金記 詩の「ゼロ地点」をめざして|高柳

> 124 062

		対談·		7	6	5	4	
2	1	対談·座談会	第一章	現代演劇	能の演技の	テクストの	演劇における時間	
水の声・地の声・フ	大野一雄との対話			現代演劇から見た能・狂言――音声・構工 岡本章	の探求と本質 観世際	テクストの身体性――アルトー、クローデル、マラルメ 渡邊守章		
コンピュータの声――!	一大野]雄/岡本章			―音声・構工 岡本音	*夫	、クローデル、マラル		
水の声・地の声・コンピュータの声――即興性、プロセスの問題 藤枝宝	大野一雄との対話 大野 雄/岡本章				能の演技の探求と本質 観世榮夫	パメ 渡邊守章	高橋康也	
藤枝守	344			331	320	286	267	

2	水の声・地の声・コンピュータの声 —— 即興性、プロセスの問題 藤枝守/岡本 章
3	能の身体の仕掛け 観世銕之亟/岡本章
4	「能を現代に開く 岡本章 / 羽田昶
5	大きくゆれる振子となって 野村万蔵 (萬) / 岡本 章
6	『能と現代──現代能『始皇帝』をめぐって 梅若六郎(実) / 岡本章

3	² ¹ 資 料			
あとがき 岡本章		第7章 	10 ジャンル未分化のゼロ地点からの創造 鵯澤久/岡本 章/小田幸子 新たな能の可能性 岡本 章/小田幸子	8 「現代能楽集」の共同作業を振り返って 櫻間金記/岡本章/小田幸子 伝統と現代――横断する身体 観世榮夫/岡本章/四方田犬彦 412 391

は ľ 8

12

私

代能楽集」の 作業

OKAMOTO Akira

岡 本

章

ように 四十六年目に 西埠頭 楽集 ありますが、 Z) は 捉え返 ら持続的に 現代演劇にどのように活かす 錬 /鵺』まで、 肉 کے 工房という劇団を主宰しておりまして、 す なります。 うタ 0 これは私が最初に名付けて始めたもので、 取 かとい イトルで連作を始めました。 り組んできましたが、 十四作品を上演してきました。 その った作業は、 間に様々な演劇的な試みを行ってきましたが、 0 特に重要な課題であったと言えます。 か、 一九八九年からはさらに深め展開するために、 また、「伝統と現代」の問題を多様な角度からど 現在、 今日はその 九七一年に創設しましたので、 他にも「現代能楽集」という名称 二〇一七年の三月に行 「現代能楽集 そのことは活 中でも能を現代 0 連 作 今年で :の試 ま L !の試 現 動

代能 みが

初期

開

3

0 取 課 題 間 題意 お話させていただきます。 具 体 的 な作業 の内 実 方法 論 などについ ٠ ۲ ر ۸ くつ か の代表的 な上 演 作

現 代 能 楽 集 0 課 題

P

り上げ

法が注目されるということがありました。 表現 作業が世界同 演劇 出の工夫、 されました。そのような過程で能や歌舞伎などの伝統演劇の本質的な構造、 た現代演劇 リアリ 決して味わうことの出来ないものがそこにある。 自在な関係性のあり方、 ています。 ましたし、 現代能楽集」 さて、 かゞ の分野では、 ズム演劇 戱 私 曲 仕掛け、 そうした時、 0 他にも は 運 |詩 現 の思想やテー の連作を試みてきたのかという理由 動 的 代演劇 の枠組みに対して、 こ こ 四 がそれ に行われました。 バ テキ レエやダ 0 世界 にあたりますが、 ストの構造も非常 美的であるとともに深くて強い存在感など、 比較してみると能 五十年、 V ンス、 の表象=代行、 に長年 戯曲、 重要な課題として近代劇批判がありました。そこでは近代 舞 携わってきましたので、 わが国でも一九六〇年代末からアン 踏 現代演劇に携わる私が、どうして 近代リアリズム演劇 俳優、 ミュー に興味深いものがあります。 の舞台上演が与えてくれる独自 単なる身振りつき文学 観客、 そしてこれを支え、 ジ の一つはそこにあります。 カ ルなど様 劇場と多面的な角度からの捉え返し もちろん現代演劇 の戯曲中心主義 々なジャ の再現ではな 他 可能にしている演技 グラ・ と言いますのも、 のジ ン 0 ル 時間 能 特に演技や身体技 ャンルの表現では の舞台芸術に接 が崩 に 小劇場と呼ば は数多く 興味を持 いことが 空間 n 俳 体 主張 優 験 (

きな課題で、 そして、 それとともに大事な課題として「伝統と現代の断絶」 明治維新以降 0 日本の近代化の中で、 多様な領域でそれまでにあった文化 の問題があります。 これ 伝統 は

内

0 を否定、 『歌舞伎を離 切断する必要が生じたわけでして、それは演劇の世界でも、 れよ。」 /『伝統を無視せよ。』/『踊るな。 動け。」 築地小劇場 『歌うな。 。 の小: 語 Щ

のモットーに見られるような、 意志的な伝統との切断がありました。 しかし、 その時同時

それまでの演劇伝統とどのように切り結び、

関係づけていくのかという、

断絶と接合」

の課

題も浮上してくるわけでして、 あります。 った「現代能 私が能の本質を捉え返し、それを現代に開き、 楽集」 の作業を積極的に展開 これは現在に至るまでいまだ解決していない、 してきた背景には、 現代演劇にどのように活か このような重要な課題を少し 困難な課題でも すのかと

「現代能楽集」の問題

意

識

でも実践的に捉え返してみたいという思いがありました。

こには三点の重要な問題意識が存在します。 それ では具体的 に 「現代能楽集」 の連作の問題意識について話 まずその第一点として したいと思い す。ます。

そ

1 在感、 多様 曲 関 などの言語、 係 な側面から能を捉え返していくこと。 性 それを支えている身体技法に注目し、 テキスト・ レヴェルだけでなく、 特に、 対象化 夢 演技や身体性、 幻能 の作業を行う。 の演技の持つ自 能舞台 在で深 の空間 性

代能楽集』 は言うまでもありません 三島 由紀夫氏 を意識してのものです。 の 『近代能楽集』 かき 私が は 現 三島氏の『近代能楽集』 言語 代能楽集」 レヴェ と名称 ルでの能 を付け、 の現代化の類まれな達成であること 八篇は能に触発され たの P, もちろん三島氏 緊密な構成

技法

射程

代能楽集

移入の使い

すが、

を前提

ر"

カュ

つて語 の身体

に

0

鎮魂

「現代能楽集」の作業 | 岡本 章

現代能楽集」の挑戦 錬肉工房 1971-2017

The Challenge of "Contemporary Noh Performance" The Work of Ren'niku Kobo 1971-2017

2018年10月1日

初版第1 刷発行

D T P 発行所 発行者 編著 印刷・製本 東京都千代田区神田神保町2 - 23 ブックデザイン 北井ビル 電話 03(3264) 5254 宗利淳一 論創社 中央精版印刷 フレックスアート 森下紀夫 岡本章 振替口座00160-1-155266

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。 A k ira printed in Japan

OKAMOTO